
O93-03 転倒ハイリスク高齢者の早期発見方法の開発に向けた取り組み—不安定板を用いた動的バランス測定による検討—

秋月 千典¹、越前谷 友樹²、金野 達也³、矢吹 悅⁴、大橋 ゆかり⁵

¹目白大学 理学療法学科、²浦安リハビリディステーション、³目白大学作業療法学科、⁴三郷中央総合病院、⁵茨城県立医療大学理学療法学科

【目的】 不安定板を用いた動的バランス測定により転倒経験者のバランス能力の特徴を明らかにし、転倒ハイリスク高齢者の早期発見方法の開発に繋げることを目的とした。

【方法】 29名の地域在住高齢者 (70.4 ± 3.7 歳) を対象に動的バランス測定と過去 1 年間の転倒経験の聴取を行った。不安定板に小型計測装置 (ともに酒井医療社製) を取り付けることで、課題遂行中の不安定板の傾きを計測し、その平均値を動的バランス能力の指標とした。不安定板は前後方向あるいは左右方向のどちらか一方にしか傾斜しないように操作を加えることで、傾斜方向毎の動的バランス能力を測定した。対象者を転倒経験者と非経験者に分類し、それぞれの動的バランス測定結果を Mann-Whitney の U 検定により比較した。尚、本研究は目白大学倫理審査委員会の承認を受けた後に実施した。

【結果】 29名のうち 5 名が転倒経験者であった。転倒経験者と非経験者間で左右方向の動的バランス指標に有意差が認められた ($p=0.018$)。前後方向の動的バランス指標には有意差は認められなかった ($p=0.355$)。

【考察】 地域で自立して生活している高齢者であっても加齢に伴うバランス能力の低下が生じている可能性があり、本研究で用いた動的バランス測定はその僅かなバランス能力の低下を検出したものと考えられる。

【結論】 左右方向の動的バランスを測定することで、潜在的に転倒リスクが高い者を早期に発見することができる可能性がある。